

## コロナ禍中の台湾生活

日本台湾交流協会台北事務所 現地職員 洪上婷

### はじめに

昨年（2020）から引き続くコロナ禍に世界各国が喘ぐ中、今年（2021）5月上旬から、台湾も遂に、コロナ禍に見舞われた。感染状況がもっとも深刻だった5月下旬から6月上旬までの時期には、一日あたりの新規感染者数が600人を超えた。普段通りに生活できなくなり、明日どうなるかわからないという不安を抱いた台湾の人たちは、どのような想いでこの困難な状況を乗り越えてきたのだろうか。本稿では台湾人の筆者がコロナ禍で体験した生活変化について書いてみる。

### コロナ禍前後の生活変容

コロナ禍以前、筆者は休日に街を散策したり、客の往来が絶えない飲食店で食事をしたりして、活気溢れる台北特有の街の雰囲気を感じることが好きだった。伝統的な市場に行った時、販売員の明るい台湾語の挨拶を聞けば、塞いだ気持ちが魔法のように晴れやかになる。こんなごく普通の日常生活は、29年近く生きてきた筆者が慣れ親しんできた生活の光景で、シンプルで人情に厚い台湾生活の在り方だった。

しかし、コロナ禍に伴い様々な制限措置が実施され、日常生活には大きな変化が生じた。5つの例を挙げてみる。①QRコードによる実名登録制の導入で、どこに行っても、まずはスマホを出して、QRコードをピント調整する必要が生じた。②店内飲食禁止のため、デリバリーサービス頼りになり、コスパの高い宅配弁当を注文し、食卓を囲んで家族と食事をする時間が増加した。③外出時のマスク着用義務化で、いつも化粧しなくていいと思うようになり、マスク越しにコミュニケー

ションをとる時は目の表情や声のトーンをより意識するようになった。④他人とのソーシャルディスタンスを保つため、電車に乗る時は、他の乗客の位置を見てから自分の座る場所を選ぶ。⑤会議や講座の開催がオンライン形式になり、ビデオ会議システムを勉強し始めるようになった。

こうした生活変化に慣れなかった人もいるかもしれないが、ちょっとした気づきが日常生活を楽しむ力に繋がるのではないだろうか。

### 自主的ロックダウン中に現れた社会の団結力

5月中旬以降の感染拡大により、外出自粛の要請が強調され、台北市や新北市を中心に、多くの人々が自主的にロックダウンを開始した。台北の買い物パラダイスと呼ばれる西門町周辺や信義区エリアでは道を散策する人の姿が一気に消え、主な幹線道路では車の交通量が少なくなった。当時、この様子を見た海外メディアは、自主的ロックダウンができる台湾人は自律的で、警戒心が強いと報道していた。これに対し、筆者は以下のように考えている。

まず、新型コロナウイルスに対する警戒心は、日頃より形成される危機管理意識と関係している。例えば、台風に襲われやすい台湾では、台風接近時に進路予報がニュースで繰り返し報道され、災害に十分に気を付けようと呼びかけている。接近後の農産物被害の発生や野菜小売価格の上昇が予想されるため、台風接近前、多く人はスーパーや朝市に殺到し生鮮食品やカップラーメンを買い込んだり、窓ガラスにガムテープを貼ったりして、早めの備えをしている。このように、台湾の人はいざという時に準備する行為に慣れている

ので、コロナ禍の中、中央感染症指揮センター（CECC）の記者会見やメディアが喚起した最新感染状況や変化に対し、常に留意し、感染拡大防止への取り組みに協力的な姿勢を示しているように見える。

第二に、自主的ロックダウンの心理的側面に着目してみたい。実際に、自主的ロックダウンが始まった当初、台湾のソーシャルメディアでは一時的に、「看好了世界，台灣人只示範一次，在兩週內解除三級（世界が注目、二週間で警戒レベル3級を解除して模範を示そう）」というスローガンが話題になった。このスローガン自体は賛否両論で、「恥をかかせるな、無理だろう」という悲観的な意見がある一方で、一緒に頑張ろうと、スローガンを引用する人も多かった。

もちろん、結論から言うと、このスローガン通りに二週間後に感染状況が収まることはなかった。しかし、スローガンは牽引役のように、コロナ禍で混乱に陥った台湾の人に行く先の道を示し、「今こそが勝負のタイミングだ」と、ウイルスに負けてはいけない勇気を社会にもたらしたと言ってもよい。

その一方で、自主的ロックダウンや外出自粛が経済的損害を与えてしまったことは否めない。例えば、大勢の外国人観光客が訪れるイメージが強い台北永康エリアでは、コロナ禍の影響を受け、閉店が相次いでいる。また、売上が大幅に減少した個人経営の店が、高い家賃を払えなくなったため、閉店に追い込まれたというケースも無視できない。このように、自主的ロックダウンは「諸刃の剣」とも思われる。

未知の感染症である新型コロナウイルスの感染拡大を防止するためには、何が必要だろうか。自主的ロックダウンは、必ずしも正しい問題解決方法とは言えないが、収束の見通しが立たない苦痛を長引かせるより、感染爆発初期に迅速に自主的ロックダウンを実行し、何週間かの外出自粛や不便に耐えれば、そこまで悲惨な感染状況には至ら

ないという考え方は、台湾人の臨機応変さを反映している。また、社会の一員としてコロナと闘いつつ、心を合わせて防疫措置を遂行できれば、きっと困難に乗り越えられるという、台湾社会に漂う粘り強い団結力こそが、感染の波を抑える鍵の一つではないだろうか。

今考えてみると、5月下旬頃から始まった自主的ロックダウンである程度、新型コロナウイルスの感染拡大を阻止したと言える。その後、新規感染者数は数百人から数十人へと日々減少し、約3ヶ月後の8月25日、台湾全土における域内感染者数がゼロになったという人々を奮い立たせる実績を上げた。

## コロナが教えてくれた事

### (1) 命がただの数字にならないように

コロナ禍にあって、筆者は毎日14時に開かれる中央感染症指揮センター（CECC）の記者会見を見ることが習慣になった。

しかし、感染状況が深刻な時期には、記者会見を見続けるうちに、徐々に悲しい気持ちが湧いてきた。その理由は、毎日更新される膨大な新規感染者数にあった。数字自体が怖いわけではないが、数字が個々の命を意味するという残酷な事実に気づいたからだ。

具体的に言えば、社会を支える人たちがコロナに感染したら、たちまち隔離対象者になり、その元気な姿が消え、ひっそりと感染者枠内の一数字に変換されてしまう。そして、この数字は後に、感染者から死亡者に変わる可能性もある。数字の影には、自宅隔離中に涙を流す人、重症化し生命の脆さを感じながら呼吸に苦しむ患者が存在するのだ。

未感染者にとって、感染者数が昨日より上昇したか減少したかというような感染情報は、数字だけを見れば把握できるかもしれないが、時には違う観点から数字を読み取る必要があるだろう。命がただの数字にならないように、コロナ感染予防

対策に努めることの重要性を認識した。

## (2) スラッシュ族と仕事の意味

近年、台湾社会においては、「斜槓」(日本語: スラッシュ, 英語: slash) という概念が流行っている。この用語は米国から由来し、人生の価値観、多様性のある働き方を意味する。複数の仕事や肩書を持つ「斜槓青年」(スラッシュ族)は、単にプラスアルファの収入を追い求めるのではなく、自分が自由に支配できる時間、趣味を兼ねた仕事、より豊かな生活、自己実現を図る人生を追求している。

スラッシュ族の人生は、決して簡単なものではない。スラッシュになるきっかけは、人生の岐路に立たされた時にした選択と言っても良い。例えば、コロナ禍の影響で、多くの人が休暇を強制取得させられる「無給休暇」の対象者となり、突然解雇され仕事を失った人もいる。生活や将来への不安が高まる中、転職や副業を考え始め、キャリアを再構築しつつ、自分の関心事をスタートさせた人たちがスラッシュ族になり、スラッシュの発展を支える礎となったと言える。

筆者は学生時代からスラッシュキャリアに関心を持っていた。しかし、就職する時、自分の気持ちに従って新たな一步を踏み出そうとしても、社会の視線が気になったため、とりあえず安定した職業に就き、安定した収入を得れば、いつか仕事の本当の意味がわかってくると思い、スラッシュへの熱情をこっそりと心の底に隠した。

仕事に慣れてきた後、休日や退勤後の時間を利用し、自分の関心事に積極的に取り組もうと思ったが、うまく進まなかった。そのうちに、吹き始めたコロナ禍という嵐が、仕事の本質を考える余裕を筆者に与えたのだ。

まず思いついたのは、「ピンチこそが転機だ。何もできない時期こそが、何とでも想像できるタイミングだ」ということ。例えば、外出自粛で家にいる時間が大幅に増加したので、自分との対話

に集中でき、本当にやりたいことは何かを考えられた。また、在宅勤務や交代勤務制の導入により、通勤時間が減った結果、自由に使える有意義な時間が増え、新しいことにチャレンジできるようになった。これらの時間こそが、何でも計画できる好機なのだ。

新しい時代こそ、新しい働き方が必要であり、台湾社会にブームを巻き起こしたスラッシュの原動力は、コロナ禍中でさらに勢いに乗り、革新の鐘を鳴らしたと考える。

## 終わりに

新型コロナウイルス感染症の収束はまだ遠い。新たな変異株が次々と出現し、人々は毎日絶え間なく課題に臨んでいる。特に、台湾社会の世論では、感染確認者の行動歴は公開すべきか、国際線乗務員の自宅での隔離期間は延長すべきか、厳しい入国規制はいつから緩和すべきか、八大サービス業(カラオケ・理容業・サウナ・ダンスホール・ディスコ・バー・酒家・特種咖啡茶室等)の営業停止措置は適切なのか等の議論が続いている。

ウイルスの脅威に加え、他人に対する不信感の危機も浮上する。例えば、感染症回復者との対面接触に抵抗感があること、感染経路不明状況が発生した時、クラスターの最初の感染源は誰かと色眼鏡で人を見ること。こうした社会的・経済的問題は、コロナ禍の影響で徐々に浮かび上がってきたと言える。

筆者にとって、コロナ禍中で体験した生活変化は、一方向で不可逆的なものであり、コロナが終息しても、元の生活を取り戻せるとは断言できない。しかし、この闘いを歩んできた人々はきっと、万感の思いを味わい、貴重な体験を経て成長し、社会の団結力の重要性を糧にし、前向きに次のステージに進んでいくことを信じている。